

「あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはすべて、父が与えてくださるようになるためです」。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」。

## I 目覚めて、立ち上がる

はっと、この目が覚めるような、目を覚まさせられるような、そんな思いがいたします。「目を覚まさない、目を覚まさない」。

鐘の音が鳴りました、この礼拝が始まる時に。オルガンの音がしました。前奏が流れた。何が起こったのでしょうか。一体何が起こったのでしょうか。教会に毎週集っていらっしゃる皆さんは、いつものように鐘が鳴りいつものように前奏が始まった、それをもって礼拝が始まる、というふうに思われたでしょう。もしかしたら毎日の、この忙しいバタバタの中で、疲れ果ててここに来ていらっしゃるの、なんとなくその音を聞き過ぎていてということもあるかもしれない。けれども、何が起こったのでしょうか。礼拝が始まった。神様が、「目覚めなさい、さあ目覚めなさい」。そう私たちに呼びかけてくださって、私たちは目を覚ましたのです。私たちが礼拝をいたします、この会堂での礼拝、皆さんは最初に賛美をささげる時にお立ちになります。立ち上がりますね。私はとても素晴らしいな、と思います。立ち上がるということは、目覚めて立ち上がる、ということ。寝ていたら立ち上がれないのですよね。目覚めました、私は今目覚めました、と主の前に私たちは姿勢を正すのです。ただ私たちが（まあ皆さんも経験したことがあるでしょう）入学式・卒業式・いろいろな式典に参加する時に立ったり座ったりいたしますけども、それにも意味があるのだと思いますけれどもね、でも、なんかよくわかんないのだけど、立ったり座ったりしんどいなあ、と思いながらするわけです。眠気まじまじなのかなあなんて思いながらも、時々そういうこともありますね。

「さあ皆さん眠くなってきましたよ。立ってください」って言ってね、礼拝で。礼拝ではあまりないか、講演会などでそうすることがありますけども。私たちが礼拝で立ち上がる時に何をしているのか。「主よ、私は今、目覚めております、今ここにおります」とそう言い表すのです。主よ、今私はここにおります」。私たちが共に集まって礼拝をするということは、ただ集まって何か良い話を聞こうという、また何かお楽しみをしようということとは、また違うことなのです。だから世の中の人々にとっては、珍しいというか特殊に見える。ちょっと変わっているというか不思議に見えるのです。“何を日曜日にこのように集まっているのか”と不思議がられるのです。けれども、私たちがしているのは、「主よ。私たちは今ここにおります」と、そう主に申し上げ、そしてまた主が、私たちの信じるこの天と地をお創りになった神が、私たちにお語りになると

いう、このことばを聞こうとしている。そのようなことを、私たちは今している。神様がおっしゃいます。「目を覚まさない。そして立ち上がりなさい」。

## II わたしがあなたを選んだ

「あなたがたがわたしを選んだのではない、わたしがあなたがたを選んだ」。

私たちは自分でいろんなことを選んで生きています、と、そう思っています。今日ここに来たのもおそらくは、来ようと思って来たのでしょう。だから“私が選んで”来た。そんなふうに私たちは思っているのです。毎日のことがそうです。ほとんど自分でいろんなことを選んで決めているのです。“けれど本当にそうなのだろうか”とこのイエス様のおことばが私たちに語りかけるのです。本当にあなたは、あなたがたは、自分で選んで生きていますのか。今私たちは自分の思い通りにならないことをたくさん経験しています。それが大きく私たちの日々の生活を覆うように、私たちを、ある意味振り回しているようなところがあります。どうして皆さんは今マスクをしているのでしょうか。どうして私たちは今まではこの会堂にぎゅうぎゅうに、というかこの席を詰めて座ってたのに、今は、まばらに座っているのでしょうか。そうです、感染を恐れて、また感染しないようにと、私たちはこれをしているのです。望んだことでしょうか。選んだことでしょうか。誰も望んでいないのです。選んでないのです。これはあまり私たちにとって好ましいことではありませんけども。

私たちが今生きているということは、自分で望んだことでしょうか。あなたが今ここに生まれたってということ、生まれて生きているということは、あなたが望んでそのようになったのでしょうか。自分で望んで生まれてきた人は一人もいないのです。私たちは自分たちの思いを越えて、自分の意志を超えたところで、誰かに望まれ、またいのちを与えられて、生まれました。直接的にはおそらく、おそらくというか確実に、あなたはあなたの父母のいのちをもらって生まれてきたのですよね。直接的にはあなたの母が、本当にそのいのちを分け与えるかのようにして、あなたは今ここに生まれ、そして生きている。自分で生きている者は一人もいない。自分で生まれた者は一人もいない。誰かに望まれ、誰かのいのちを戴いて、生きている。今日までそのいのちは、誰かによって育まれて守られて生きてきた。私が生きているということ、ここにいるということは、私が望むだけではどうにもならないこと、あなたが望むだけではどうにもならないこと。そう思う時に、いのちは恵みだ、心からそう言うことができるでしょう。いのちは与えられたもの。いのちは任されたものだ。

## III 主はここにおられる① 《神のことばの再現》

あなたは今日生きています。今ここにいます。それは神が望まれたからだ。あなたは自分の意思を超えて神の御心によって生きている。今ここにいます。あなたが生きることを望む方が、あなたがいることを尊いと言って喜び歌っておられる。私たちが賛美歌を歌うように、神様があなたのことを喜び歌っていらっしゃる。そのような聖書の言葉というのがあります、ちょっと本筋の箇所と離れるかもしれませんが、その箇所を開いてお読みしたいと思います。ゼパニヤ書というところが旧約聖書の中にありまして、そこにイスラエル、エルサレムに向かって語られた神様の言葉が記されています。ゼパニヤ書の3章の16節と17節にこうあります。「その日、エルサレムは次のように言われる。『シオンよ、恐れるな。氣力を失うな。あなたの神、

主はあなたのただ中であって、救いの勇士だ。主はあなたのことを大いに喜びその愛によってあなたに安らぎを与え、高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる』と。」

「シオンよ、恐れるな。氣力を失うな。あなたの神、主は、あなたのただ中であって救いの勇士だ。主はあなたのことを大いに喜び、その愛によってあなたに安らぎを与え、高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる」!! 主がここにおられるのです。主が今ここにおられるのです。あなたが今ここに座っているのと同じ確かさを持って、いやそれ以上に確かに、主はここにおられるのです。どんなに嵐が吹こうとも、どんなに困難が起こって、そして私たちがここに共に集まることが難しくなったとしても、主はここにおられるのです。あなたのただ中におられるのです。あなたがたのただ中におられるのです。主はこの教会と共におられるのです。だから恐れるな、恐れてはならない。そう、どんなに私たちがこの礼拝をささげることが難しい、ともに集まることが難しい、そう感じだとしても、主はおっしゃるのです。「恐れるな、わたしはあなたがたのただ中にいる。救いの勇士だ。そしてわたしは聞かせよう。あなたがたを喜び歌うその歌を。あなたたちがわたしを喜んで歌うように、わたしはあなたがたにわたしの歌声を聞かせようじゃないか」と。

礼拝は、神様の歌声を聞く時でもあります。私たちが私たちの声を神様に聞かせる、祈りの声を聞かせる、賛美の声を聞かせるのと同時に、神様が私たちにその声を、歌声を聞かせてくださっているのです。それは私たちのこの両の耳で聞くことができることではない。この耳に聞こえないからそれはないのだ、というのは今の私たちでしょう。この両の目で見ることはできないから、それはない、というのが今の私たちではないでしょうか。まあ今も昔もそうだと思います。聞こえない見えない、じゃあそれは無い。本当にそうですか。聞こえないものは無いのですか。見えないものは無いのでしょうか。人間の耳が捉えることのできる音は限られています。人間の目が見ることができるものは限られています。人間のこの鼻が嗅ぐことのできる香りは限られています。人間が知ることができるものは限られています。しかしこの世界は、人間が感じ、知ることができることを超えた世界です。神は私たちに語りかけ、歌って聞かせてくださるのです。それを私たちの口を通して、私たちの声を通して、それを聞かせようとなさることなのです。聖書が読まれるということは。

皆さんはそのことをよく分かっているかもしれないかもしれません。今日は聖書講演会ということで全くそのことに触れたことのない方々がいらっしゃるかとそのように思い、少し話をするのですけれども。聖書が読まれるということは一体何をしていることなのか。神の声を、神の言葉を、ここに再現しているのです。

今はいろんな録音の機器がありまして、まあ私の時代はカセットテープというのがありまして、（今もそれはあるかもしれませんがけれど）、今はデジタルでいろんなことを録音できます。そして再生をして音を聞いてね、そのようなことをするわけです。昔はそういう機械がないのです。そうするとそれを再現しようとした時に何をするか。記録をする時に何をするか。こうやって文字をもって記録をするわけです。記憶の中に刻み込んで、記憶を記録するのですよね。そしてそれを私たちが、声にすることで再現をするわけです、聞かせるのです、この耳に。聖書が読まれるということは、実はそういうことなのです。神の声を聞くことなのです。この耳で聞けるようにすることなのです。だから教会はずっとこの長い歴史の中で、聖書を朗読することを大切にしてきたのです。読むことではなくて朗読すること。声に出して読み上げることを、大切にしてきたのです。そしてそれが読まれる時に人々は、“神が語っていらっしゃる”、“神の声が聞こえる”、とやってきたのです。それは今も変わらないはずで、教会はそのことを大切にしているのです。神の声が聞こえる。

だから礼拝は、神の声が聞こえる場所なのです。神の声の響きの中に、神の歌声の響きの中に、今私たちは生きている。あなたのいのちが、今あなたがここにいるということが、この私たちの理解を超えた、すべてのいのちの源である創造主、神の存在を証ししているのです。

神様は、私たちのいのちのただ中にいらっしゃる。ご自分を見出すようにと、招いておられます。愛と呼ばれるお方があなたを生かしている。そう、あなたは今までこの愛によってここまで生きてきた。そのあなたを生かす“愛”と呼ばれるお方が、「わたしを見出すように」と招いておられる。そうなのです、私たちが“探して見つけよう”じゃないのです。神様が「わたしを見つけないさい」、そう言って私たちが招いている。

「あなたがたがわたしを選んだのではない、わたしがあなたがたを選んだ」。その声の確かさが、今あなたをここに導き、ここに座らせているのです。

#### **Ⅳ 主はここにおられる② 《同じ確かさをもって》**

先ほど今朝ですね、この前の時間、中高生の礼拝にも出させて頂いてね、少し聖書の話をしていただきましたが、その時に「神様はどこにいるか」という質問をしました。まあ中高生の方々にはちょっと意地悪な質問だったとそう思います。え？え？まあそんな反応でしたので、スタッフの人たちね、スタッフの人たちは分かっているでしょうねと思って聞きました。まあ、やっぱりちゃんと答えてくれましてね。ある方はこう言ってくださいました。「心の中にいる」。心の中に。それでまたちょっと意地悪な質問をいたしまして、それはどういうことですか、と聞きました。意地悪ですね、そんなこと聞かれて、えー？てなりますよね。神様はどこにいるのでしょうか？今ここにいるのです。イエス様どこにいるのでしょうか？今ここにいます。あなたがここにいるのと同じ確かさを持ってここにいる。心の中にいます、という答えはそういうことを言っているのです。私の心の中にいるっていうことならば、私がここにいるということと同じように、イエス様は、神様はここにいるってことです。あなたが今ここに座っているのと同じ確かさを持って神様がここに座っていらっしゃる。時に私たちは、答えは知っていてもそのことを知らないってということがあります。言っている意味が分かるでしょうか。答えは知っていても、そのことを知らない、味わっていない、実感していないってことがあります。でも実感していないからそれが無いということではないですよ。あるのです。

神様はこの聖書の中で何度も何度も仰います。「わたしはともにいる」、「わたしはともにいる」、「わたしはともにいる」。何度も繰り返していらっしゃいます。「わたしはともにいる」って。しつこいくらいに繰り返しています。「わたしはここにいる」、「ともにいる」って。何遍も言われないと、私たちには沁みてこないし、分からないのですよね。忘れちゃうのです。眠りこけてしまうのです。今ここにあなたはいます。そしてこの中継を見ていらっしゃる、そのあなたもここにいる。今あなたがここにいる、そしてイエス様はここにいる。これはしっかり持ち帰ってほしいのです。立ち上がってこの会堂を出て、あなたが家に帰る時に、イエス様をここに置いていかないでほしい、っていうか置いていくことはできないと思います。でもすっかりイエス様をここに置いてきたつもりで帰ってしまうことがあるでしょう。でもイエス様は違うのです。あなたが立ち上がればイエス様は立ち上がり、そしてあなたが歩いてこの会堂を去れば、イエス様はこの会堂から出て行く。救いとは何か、救われるとは何かというと、このイエス様と出会うことです。イエス様のこの確かさを知ることです。このイエス様のいのちに目覚めて生きることです。

救いって言われた時に私たちはいろんなイメージを持っています。私たちは救われるということは、いろんな困難や苦しみがなくなっていくことだろう、とそんなふうに思っている。困難が続かない、試練が終わる、ということが救いではないだろうか、もちろんそれも救いでしょう。しかしそれは、“苦しみからの救い”であり、“困難からの救い”ということでもあります。聖書が語るその救いの一部分は示していても、本質ではない。だから私たちは今も困難に出会う、試練に出会う。病いが襲う。でも時に私たちはそのことで驚き、そしてまた悩み、落ち込むわけです。救われているのにどうして。本当に私は救われているのだろうか、というふうに疑ってしまうわけですね。けれども救いとは、困難や苦しみがなくなってしまうことではない。またどこか遠い世界に行くことでもない。いのちに目覚めて生きるということ。「わたしがともにいる」と言われる、そのお方がともにいることに目覚めることです。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めだ。人が自分の友のためにいのちを捨てる、これよりも大きな愛は誰も持っていない」。いのちのことばです。戒めです。イエス様をご自分の“いのち”としていらっしゃった、そのおことばです。このことばに生きることです。これが救いです。

## **V イエスの遺言**

救い。それはイエス様のいのちに生きることです。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合い、友のためにいのちを捨てること」と言われるイエス様のいのちに生きることです。

今日あなたに救いがあるのです。救いに招く神の声が天から、神の国から響いて迫っているのです。上の方で何か響いていて、あーなんか聞こえるなあ、ではなくて、降って来て、あなたの目の前に座って迫るのです。救いは迫ってくるのです。救いはあなたを招き、あなたに迫ってくるのです。

「わたしがあなたがたを愛したように互いに愛し合い、人が友のためにいのちを捨てる、これよりも大きな愛はない。この愛に生きよ」。イエス様の遺言。これは、今朝私たちがともに開いているこのことばは、イエス様の遺言です。イエス様がこの世を去る前夜に、私たちのために“いのちのささげもの”となる前夜に、お話しになったことです。そのことばの重みを私たちは今日感じるのです。これは遺言なのです。

あなたは死を目前にした時に何を語るでしょうか。どんな思いでその言葉を語るでしょうか。突然の死ならば語ることができないかもしれないけれども、もしあなたが明日その命が取り去られるということが分かっている、そして何かを、大切な愛する者たちに、友と呼ぶ者たちに語ることが許されているとすれば、あなたは何を言う？ あなたは何を語る？ 考えさせられますよね。私もこの自分のいのちの長さというのを知らないわけです。でも今いろんなこのコロナの感染症のことがあって、結構有名な方が亡くなったりするようなニュースを聞いたりするとね、死が突然に自分に迫ってくるということを感じざるを得ない。そうした時に、私は何を残す？ 何を言い残すのだろうか？ って考えるわけですね。焦りますよ。いろんな何か言いたいことはあるし、大切なこともあるのだけれども整理がつかなくてね。なんかくだらないこと言って終わりそうな気がしてちょっと困るわけですね。“あの大事なあれはあそこに置いてある”とか何かね、そんなことを伝えていて、それはそんな大事なことじゃないと思うのです。でも一生懸命考えないとできないことだと思いますよ。何を伝えようか、一番大事なことって何だろうかって。

だからイエス様も、このお語りになったことはね、何て言うのでしょうか、思いつきで話されたことではないと思います。その事を悟った時に、やっぱり何を語ろうかということはずっと思い巡らしながら、それをずっと考えながらおられて、そして語られたことだと思います。弟子たちに向かってね、これが大事だ、と。だから何度も繰り返されていることばがありますよ。このヨハネの福音書に記されている13章辺りからずっと最後のことばが語られていてね、17章辺りまで来ます、祈りになって。そこに、「互いに愛し合いなさい」ということが繰り返されているのですよね。このことばの重み、イエス様のいのちの重みってというのが、ここにあるのです。これこそまさにいのちの言葉なのです。そしてイエス様が私たちにくださろうとしているものなのです、いのちなのです。

## VI イエス様が与えてくださったもの

イエス様は私たちに何をくださったのか。ご自分のいのちなのです。イエス様はご自分のいのちを私たちにくださったのです。十字架におつきになって、私たちのためにいのちを捨てられた、って私たちはよく言いますよね。でも私は時々なんか“捨てた”ってという言葉に違和感を感じるのですよね。何かって言うと“捨てる”って言うとね、なにかゴミ箱かなんかにぼいってやるような、そんなイメージです。まあそこで意味することは“手放した”ってことですけどね。無駄にしたんじゃないのです。イエス様はご自分のいのちを無駄にしたんじゃないのです。与えたのです、あなたに。あなたにそっくりそのまま与えたのです。これが救いですよ。イエス様のいのちをいただく。イエス様のいのちを頂いて生きるっていうこと、これが救いですよ。だから今、あなたはイエス様のいのちを頂いている。イエス様のいのちを頂いて生きている。イエス様のいのちに生きている。

クリスチャンと名乗るあなたは、教会で洗礼を受けたあなたは、イエス様のいのちをいただいて生きている。だから主は仰る、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んで任命した。いのちを与えた」。「あなたがたが行って実を結び、その実が残る、わたしの名によって父に求めるものを、すべて父があなたに与える。実が残る。実を結ぶ」って、どうしてこんなことが言えるのかってね。「私たちを選んで、実を結んで、実が残る」なんてね、私たちはこれを聞いてプレッシャーに感じるわけですよ。実を結ばなきゃいけないのか、残るかどうかわかんないなーとか言いながらね。選んでくれるのはいいのだけでもね、選ばれたプレッシャーってありますよね。大丈夫だろうか。でもイエス様は自信をもって選んだのです。自信をもって実を結ぶと仰ったのです。どうしてでしょう。それはイエス様のいのちをあなたに与えたからなのです。あなたの中にイエス様のいのちがあるからなのです。だからイエス様は、「わたしがあなたを選んだ。」と、そう言ってくださるのです。そして「実を結ぶ。」と、そう言ってくださるのです。「あなたがたはわたしの友だ。」そう言ってくださるのです。

こんなことばを私たちはどこで聞くことができるのでしょうか。「わたしがあなたがたを選んだ、あなたがたは実を結ぶ、あなたがたはわたしの友だ」。“友だちいますか”って聞かれてね、なかなか答えることって難しいんじゃないかなって思うのです。自分が友だちだと思っていなくても、相手がそう思ってくれているかどうか、分かんないし、とかいろんなことを考え始めると、私なんかも聞かれたらね、本当にドキドキしてね、“いないかも”って言っちゃいそうです。友だちいませんなんてね。でもイエス様は私たちに言ってくださる

のです。「あなたがたはわたしの友だ」。そしたらね、私たちは自信をもって言うことができるのです。“私はイエス様の友だ”と。まあ自分から積極的にそういう風に言えたらいいのですけどもね、なかなか言えない。言ってもらえれば言えるなと思うのです。こんな言葉を私たちはなかなか聞くことができないのですね。“あなたは私の友だちだ”なんていうことをね。いつ聞いたか？って。“友だち”と言われることは嬉しいですよ。“あなたは大切だ”とか、“本当にあなたは私にとって尊い存在だ”とか、なんかそんなふうなことを言われて認めてもらうことってなかなかないのです。むしろ“駄目だ”とかね、そういう風なことを言われることの方が多くて、そういうことばかりを聞いて私たちは生きています。だから私たちを呪う声をたくさん、私たちは日々聞いているのです。私たちが喜ぶその声、歌声なんてほとんど聞こえないままに、私たちは日々を過ごしている。だからこのことばを聞いても私たちの心が動かない。「わたしがあなたがたを選んだ」、「あなたがたは行って実を結ぶ」と。だから主イエス様は、何度も何度もこのことを私たちに語りかけてくださるのです。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたは行って実を結ぶ」。

今日あなたに救いがあります。イエス様は私たちに向かって喜びの歌を、希望の歌を歌ってらっしゃいます。「わたしがあなたがたを選んだ。あなたはわたしの友だ。わたしが愛する者、わたしの愛で愛し合い、友のためにいのちをささげ、わたしがあなたにいのちを与えた、わたしのいのちで生きる者たち。」と。イエス様は今日私たちに、ご自分のその歌声を聞かせてくださっています。信仰をもって生きるということは、それはこのイエス様の歌声に合わせて、自分たちに希望の歌を歌っていくことです。神を仰ぎ、そして私たちにしてくださるそのことを喜び祝いながら、何度つまづき倒れても立ち上がって、そう、立ち上がって、あの礼拝の始まる時に賛美をささげた時に立ち上がったように立ち上がって、信仰と希望と愛の歌を歌い続けて生きることです。私たちは今、愛し合えないというこの暗闇の中にいる。愛し合うことが難しいというこの暗闇の中にいる。それは今流行っているこのコロナのいろんな問題、ということもあるでしょう。けれどもそれだけではなくて、私たちの中に潜む罪が、私たちを、愛し合えなく、愛に生きることができなくさせているのです。

日々の暮らしを振り返れば、なんと愛することのできない者だろうか、そのように私たちは悩み、神を信じれば信じるほど、その光に照らされれば照らされるほど、その闇の深さに失望させられる。けれど私たちはやっぱりここに来るのです。どうして？ 救いがあるからです。イエス様が私たちを信じて、歌っていてくださるからです。「わたしがあなたがたを選んだ。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたは行って実を結ぶ。わたしがあなたにいのちを与えたのだから」と。そう、私たちもこの主イエスの言葉を口ずさんで、ここから出かけて行くのであります。

祈りましょう。

主イエスは私たちをお選びになり、友と呼んでくださる。私たちが、「どんな資格があるのでしょうか」、そう問いかけたとしてもあなたはお答えになるでしょう。「わたしがあなたがたを選んだ。行って実を結ぶ。あなたがたはわたしの友だ」。そのおことばの前に私たちは、ただただ伏して、それを「アーメン」と受け取るだけであります。どうか信じさせてください、あなたのおことばを。そして私たちの内にあるこのあなたの

いのちが、この一週間も、またこれから先ずっと、力強く燃え続けていくように。どうかここにいるあなたが友と呼ばれる大切な一人一人を、今あなたが救い、そして力づけて、ここから立ち上がらせてくださいますように。主イエスキリストによって祈ります。アーメン。